

ワ ル ツ (舞踊) の 歴 史 (I)

西 山 敏 子

序

1. ワルツに興味をもった動機

1955年、筆者は大学二年の体育クラスにイギリスのフォーク・ダンスを教え、そのまとめとして、ロビン・フッドとマリアンを中心にした五月祭を同年五月のプレイ・ディのプログラムの一部に加えた。1948年、バーンズ商会発行のフォーク・ダンス・ライブラリーを参考とし、筆者の体育学校時代の経験を加え、学生をコスチューム班、音楽班、文学班、歴史班、ダンス及びゲーム班等の研究グループにわけて、当時のイギリスの風俗、習慣等を勉強した。その時の資料の中にあった「イギリスのフォーク・ダンスには他の多くの国々の人々になじみのあるソーシャル・ダンス・ポジション、又はショルダー・ウエイスト・ポジションに組み合って踊るワルツ、ポルカ、ショティッシュ等のないことが注目される。」という数行が、私の興味をそそったのである。

次に、ワルツを語る時、常に筆者の心に浮んでくるのは、ゲーテ作「若いウェルテルのなやみ」に出てくる舞踏会の場面である。ウェルテルが、愛するロッテに二度目の対舞を申しこむと、彼女は三回目のを約束する。ウェルテルがワルツを上手に踊ることの出来るのをみぬいた彼女は、自分はドイツ舞踊が大好きで、二人が組になっていると、ドイツ舞踊の時も、そのまま組んで踊ることが出来ると語る。後になって、ウェルテルは、友人のウィルヘルムに、こう書いた。

(4) 「……………ぼくたちはしばらくのあいだ、いろいろに腕をくみあわせて楽しんだ。なんという魅力、なんというかるやかさだろう！そしてやがてワ

ルツになって、天界の星のようにおたがいのまわりをまわりだすと、もちろん最初のうちは、それができる者はごくわずかだったから、少しばかりごちゃごちゃになった。ぼくたちはあせらずに騒ぎのしずまるのを待った。そして下手な連中が引きさがって舞踏場を明けわたしたとき、さっと勢よく踊りはじめた。……………こんなにかるがると踊れたことはない。ぼくはもうこの世の人ではなかった。愛らしいかぎりのひとをこの腕に抱き、ともに電光のように飛びめぐって、まわりのすべては消えてしまう。そして——ウィルヘルムよ、正直に言おう、ぼくは誓いをたてたのだ。ぼくが愛し、求めている少女には、けっしてぼく以外の者とワルツは踊らせないと、たとえそのためにぼくが滅びようとも。……………」

何が若いウェルテルをこの様に恍こつとさせ、自我忘失の境に追いやったか？この疑問がいつまでも筆者の心に残った。そうして今回ワルツを研究するにあたり、この舞踏会の場面、そうしてこの悲劇の主人公のワルツについての描写が後世のワルツ研究家にとって大きな意義をもつことになったことが判明し、大いに驚き、又意を強めたのである。

2. 民族的気質と、音楽及び舞踊との関係

現在、社交ダンス界の中心であり、1952年、エリザベス女王二世の即位に際しては、戴冠ワルツ迄発表したイギリスのフォーク・ダンスに何故ワルツがなかったのだろうかという疑問は、何故日本に3拍子の音楽、舞踊がないのだろうかという疑問につながった。

春秋社出版の世界音楽全集の日本民謡曲集を調べてみると、この全集には大正10年頃から、昭和3、4年頃の作品が多く集められ、作曲家11人、140曲中 $\frac{3}{4}$ 拍子のものは、わずか3、4曲で（山田耕作氏作曲）ある。勿論これは西洋音楽がはいってから作曲されたものであるから、純粹に日本の伝統の音楽とはいえないであろう。又東京女子体育大学紀要4号に発表された岡田信子女史の「日本の伝統音楽とその動き」に引用された、日本のわらべ唄7曲のすべてが

$\frac{3}{4}$ 拍子又は $\frac{4}{4}$ 拍子である。C.ザックス氏は「⁽⁵⁾……ここに於て、我々は二つの世界、一つはじっと一つの音を一樣に持続する静、他の一つは神秘的な無からこの上もない激しい力を放出して、2オクターヴも跳躍する狂暴なまでの奔放さに接する。『静』と『跳躍』は二つの対照的なメロディが識別されるとき、必然的に心に浮ぶ言葉である。又『静』と『跳躍』はすべてのダンスの両極である。それならば、ダンスの『跳躍』と『静』の対照と、メロディの音域のひろさ、せまさに対等的関係があるだろうか？」と書いている。

又、彼は、「⁽⁶⁾跳躍的な舞踊を好む民族に於ては、音楽も又ダイナミックで、激しい興奮と情熱は、メロディの音域と跳躍だけでなく、リズムの自由奔放さにも表現され、一つの歌に、 $\frac{5}{4}$ 、 $\frac{3}{4}$ 、 $\frac{2}{4}$ 、 $\frac{4}{4}$ 拍子が用いられ、その反対に静的な地方では、リズムは厳格で一定している。或定まった拍子の小節が一旦きまると、通常それは持続し、不思議なことに、それは殆ど偶数である。『静』の舞踊の一番広い領域は東部及び東南アジアで、それは同時に4拍子の中心となっている。この動作の形態とリズムの混同が何故近代ヨーロッパに於て、殆ど例外なく、静かな導入部の舞踊が $\frac{4}{4}$ で、跳躍又は後続の舞踊が $\frac{3}{4}$ であるかを説明している。」

次に彼は、「⁽⁷⁾民族の奇数と偶数に対する宇宙的概念には、著しい相異のあることが注目される。女族長文化、農耕文化、月礼賛文化に於ては、偶数が神聖なものとみなされ、族長文化、狩猟文化、太陽礼賛文化は、奇数を好み、これはリズムに於ても同様である。」と述べている。このことは筆者がワルツの歴史を述べるにあたり、参考までに触れたので、この問題だけでも、一つの興味あるテーマとなろう。

3. 「3」という数の神秘

日本の音楽と舞踊には3拍子がないということについて、筆者は深く研究したわけでもないし、多く触れようとは思わない。併し「3」という数は不思議な数である。西洋文化に於ても「3」という数は、ミスティカル・ナンバーの一つとされ、今すぐ頭に浮ぶものでも、コールリッジ (S. T. Coleridge)は

「クブラ・カーン」に

“Weave a circle round him thrice,
And close your eyes with holy dread,”

とうたい、ワーズワース (William Wordsworth) は「郭公鳥によせて」に於て、

“Thrice welcome, darling of the Spring!”

と春を告げる小鳥を大歓迎している。

日本に於ても、「女は三人寄ると姦しい。」とか、「三人寄れば文珠の知恵」とか、「仏の顔も三度」とか、「三度目の正直」、とか「3」のつく諺が多く、「三拍子揃った」といえば、元々金、学問、人格とが申し分のないということに使われていたのが、ひいては万能的なという意味に用いられる様になった。又「早起きは三文の徳」とか、「三べんまわって煙草にしよう」とか、三猿主義とか、「3」のつくものは列挙にいとまがない。近くに例をとれば、当大学の校章三つ葉のクローヴェーは、⁽⁸⁾「身体、精神、靈魂を象徴し、この三者が一致調和したときに完全な人格が育成される。」としている。引用の諺の初めの二つは、三人という人間の数が最小の社会構成単位であり、それに続く三つは、完全とか極限とかいう意味を持つのであろう。

ワルツが $\frac{2}{4}$ 、 $\frac{4}{4}$ 拍子のみならず、同類の $\frac{3}{4}$ 拍子のものにくらべてすら、舞踊に於ても、音楽に於ても長命を維持しているという原因は那邊にあるのだろうか？筆者は、前記の「3」というミスティカルな数と、それに全く無関係とも思われないワルツの虜と成り果てたのである。

4. 生命のリズムと、ワルツの与える心理的影響

リズムについては、多く研究されているから、その舞踊的・音楽的、はた又自然界・人間世界に於ての重要性について述べる積りはない、が筆者は、本題のワルツの歴史にはいる前に、ワルツには他の舞踊にない、人の心をとらえ、

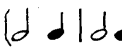

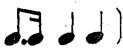
陽気にし、夢をみさせる要素があり、それはどこからくるのだろうかという点について筆者なりの考えをのべてみたい。

人間の身体機能には一定のリズムがあり、そのリズムが攪乱された時人間は健康を損い、停止した時は死を意味することは万人の知るところである。

血液を循環させる原動力、即ち生命のリズムとなるものは、心臓の搏動で、心臓の筋肉運動を収縮期・弛緩期・休止期の三つに分け、この三つがリズムカルに繰り返される。そうして左心室が収縮し、血液を大動脈の中に押し出すごとに、動脈は正しい脈搏を打つ。脈搏は安静時に於ては、個人差はあっても健康状態であれば、一定の早さで、平常人の大人は1分間に約70である。脈搏は自由意志によって、その速度を増減することも、とめることも出来ない。勿論、激しい運動をすれば脈搏は早くなり、安静時の3倍以上に及ぶこともあり、又訓練によって安静時の脈搏数も少くなり60以下、時には50以下を数える運動性遅脈のものが少なくないと言う。こうして1分間に例えば70回きこえる脈搏も1回の中には三つの期間が内在しているのである。又呼吸は安静時1分につき何回、即ち脈搏数の $\frac{1}{4}$ をもって平均呼吸数としているが、その呼気と吸気の間に休止期(即ち胸囲をはかるべき時)があり、これは脈搏とちがって外部から或程度観察が出来る。その三つの時間的關係はこうこうであると断言出来ないが、とにかく3拍子である。(事実、メトロノームを使って観察してみたが意識過剰となり、正確なデータは得られなかった。)これが激しい運動をすると、この休止期が消失し、呼吸はせかせかとはやくなり、呼吸数は運動の激しさに比例して増加し、呼吸のリズムは2拍子となる。

人間に与えるリズムの心理的影響はここにあるのではないかと思う。リズムには客観的なリズムと主観的なリズムが存在する。急いで歩いている時は心臓は2拍子で前へ進め進めと躍動する様に感じる。その同じ心臓も散歩するとき、3拍子で余裕をもって楽しげにひびいてくる。水の流れも嵐に荒れ狂う時、又急流ならば2拍子、静かな流れは3拍子で流れている様に思われる。又その静かな流れも、自分の気持次第で2拍子に思われることもたまにはあろう。

もう一つの実例をあげよう。毎日岡田山に登る者にとって、数年前迄、音楽館の横の階段のある坂道はなやみの種であった。各段一步の間隔に階段があるなら、踊り場の様な広い部分がなくても、肉体的の疲労は心理的に防ぐことが出来るだろうが、その配置は無茶苦茶であった。それで一定したリズムもなく、同じ足をつづけてふみ出さなければならぬことが屢々あったから、その足にける負担は想像以上であり、心理的な疲労も多かった。現在はちがう。狭い階段を左足でのぼり、次の稍広い階段を右、左と2歩で進む。そうすると次のせまい階段は右足に負担がかかる。そうして3拍子でのぼって行けば、知らない中に階段をのぼりつめる。私達は自分の生活にリズムの知恵を応用しなくてはならない。

同じ $\frac{3}{4}$ 拍子でありながら、例えばワルツ⁽¹⁰⁾  とマズルカ   では、前者のリズムは流れる様に安定し、後者は軽快で躍動的で、付点8分音符がくりかえされることによって、何となくせきたてられる様な気持ちになる。読者は階段のあるあの坂道をワルツ又はマズルカを口ずさみながら登ってみれば、その心理的な相異に気づかれるであろう。

後にくわしく述べるが、一概にワルツといっても、純粋芸術音楽のワルツを除いた舞踊に関するものだけでも、現在踊られているものに、社交ダンス（ウィнна・ワルツ又はクィック・ワルツとモダーン・ワルツ又はスロー・ワルツの二種があり、又オールド・ファッションド・ワルツもこの範囲にはいる）、フォーク・ダンスのワルツ、バレエのワルツ等極めて多種多様であるが、最も基本的なステップは、社交ダンスに於ては初心者が殆ど必ず練習させられるところのボックス・ステップである。簡単に説明すると：

- 1 小節目： 左足で前進…… 1 拍目
右足で右前方へスライド…… 2 拍目
左足を右足にひきよせる…… 3 拍目
- 2 小節目： 右足で後退…… 1 拍目
左足で左後方へスライド…… 2 拍目
右足を左足にひきよせる…… 3 拍目

以上の様に、ワルツ・ステップの単位となる動きは 6 拍 6 ステップで完成し、これが左まわり又はリヴァース・ターンの基本となり、前記を右足で始めるときは右まわり又はナチュラル・ターンの基本を形成する。但し、ボックス・ステップで回転を練習するときは、3 拍で $\frac{1}{4}$ (90度) しか回転しないから、元の位置にかえるには、12 拍 12 ステップを必要とする。

ここで注目したいのは、ワルツの楽しさは **down, up, up** と続いてゆく身体の動きの抑揚と、各小節の最後の 1 拍、即ち 3 拍目に必ず、わかれて動いていた両足が再びめぐりあって、きちんと揃い、次のステップをふみ出すべく緊張し、最高点に達し、(きびしく言えば、その瞬間、即ち 3 拍目の終りには次に立ち足となる方の足が既にリラックスして、ステップをとる方の足がスタートし始めていなければならない) この動きが続いてゆくのである。こうした身体のリズミカルな動きは、指揮者のふる指揮棒が **down, side, up** と幾何学的根本である三角形をえがいている様に、ワルツの基礎ステップも、

- 1 拍目： 前進又は後退 …… **down**
- 2 拍目： サイド・ステップ …… 除々に **up**
- 3 拍目： 後退又は前進 …… **up**

と平面的にはほぼ三角形の動きを、高低に於ては指揮棒がえがく線をたどっている。ワルツの伴奏部が 1 拍目は低く、2 拍目、3 拍目は高く跳躍して密集和音を形成しているので、音楽にくわしくないものでも、1 拍目のアクセントに注意すればリズムにのりやすく、これが前記の心理的条件と相俟って、ワルツを一層楽しいものになっているのではなからうか？

5. ワルツの功罪

ほとんどすべてのものに功罪の 2 面がある様に、人々に美しいロマンティックな夢を与え、青年を魅了ようし、勇気づけて愛の告白を促すこのワルツも、その反面、時には軽佻浮薄なムードをかもし出し、その過剰なエロティシズムは、道ならぬ恋に人々をおとし入れるわなであったことを見のがすわけにはい

かない。事実この舞踊ほど長命を保ち、その 400 年にもわたる歴史に於て、物議をかもし、屢々禁止令にあい、その時代時代の宗教家、道德家、作家の非難のまともになったものはない。

又その謎を秘めた様なひびきは、例えば、スパイ映画「間諜 X 27」(原名 Dishonoured 監督、スタンバーグ)で、主演女優、マルリィネ・デトリッヒが、イワノウィッチ作「ドナウ河の小波」を弾いたとき、伴奏部の 1 拍目をきりつめて、2 拍目に強いアクセントをおいたそのダイナミックな演奏ぶりは、はりつめていた緊張感を 2 拍目に爆発させ、ワルツには珍しい緊迫感を与えた。要するに、この映画の面白さは、この曲の中に何か謎めいたスパイの信号をおりこんだことだった。これは戦前に見た映画で、実を言えばこの曲がイワノウィッチ作か、シュトラウス作の「青きドナウ」かはっきりした記憶がなく、映画会社勤務の友人に問い合せたが、数十年前封切られた映画の音楽の記録は手元になかったと見え、期日に間に合って返答がなかった。作曲家の作風から前者と推定したのは少し無謀であったかも知れないが、どう考えても「青きドナウ」の様な陽気なウィンナ・ワルツではこの胸をとどろかす様な不安な雰囲気を出せよう筈はない。

又、ワルツは屢々述べた様に、他の拍子にはないゆとりというか、まとうかががあるので、それを応用、誇張し、コミックな場面に用いる場合もある。第二世界大戦終戦直後封切られ、笑いにうえていた当時の映画ファンをわかせたカラー映画に、ダニィ・ケイ主演の「虹をつかむ男」(原名: The Secret Life of Walter Mitty)がある。ダニィ・ケイがシュトラウス作曲「青きドナウ」のまのびのした演奏に合わせて、ボキシニングをする抱腹絶倒のこっけいさは、何故、か弱い筈の彼が、ボクシングをやらなければならない立場になったかという話の筋は忘れ果てたが、あの音楽のかもしれない喜劇の雰囲気と、高速度で撮影したダニィのかんまんな動きは、頭にこびりついてはなれない。

6. 序のしめくりとワルツの歴史への展開

舞踊は音楽、絵画、文学其他の芸術とちがひ、身体そのものが発表の機関で

あり、芸術作品であるために、後世にのこされた作品そのもの、又は具体的な記録によってその起源とか歴史をさぐることは不可能である。写真術、映画、テレビの発達した現代に於てすら、このなげきは完全に解決されていない。何となれば舞踊は視野を離れれば、永遠の彼方に消えてゆくはかない芸術であり、再現し様としても、生きた肉体が目前で躍動する時の立体的、空間的な動きを平面的な画面に再現することは出来ないからである。

ワルツは第19世紀に於て、他のすべての舞踊を殆ど消滅させてしまった程の勢で流行したが、その起源については、西欧諸国、特にドイツ、フランスの専門家の中に大論争がおこり、その論争には、当時両国の間にあった国家的反感が大いに介入した。ドイツ人は、オーストリアの山岳地方 **Landle** に発生したレントラー (**Ländler**) がワルツの先駆者であると主張し、フランス人はフランスの **Provence** に起源をもつヴォルタ (**Volta**) がワルツの先祖であると主張してゆづらなかつた。現在筆者が多くの音楽家に接してワルツの起源をたづねると、その答えは必ずレントラーであるし、又多くのこれに関する図書も同じことを記録している。というのはレントラーは舞踊としても、フォーク・ダンスの中にその名をみるが、舞踊としてよりは、むしろ音楽として多くの作品がのこされて居り、現在でも生きた音楽であり舞踊であるのにくらべて、ヴォルタは舞踊としても音楽としても17世紀前半に消滅してしまい、レントラーの様に直属の後えいをはっきりと戸籍上にのこさなかつたからである。併しこの薄命のヴォルタのとぎれとぎれの記録には筆者の興味をそそるものがあり、ワルツの歴史を語るに際して先づ第一にとりあげることにする。

(1) Ann Schley Duggan: Folk Dances of the British Isles p. 39

(2) 男子が女子の腰に両手をおき、女子は男子の肩に両手をかけて、向いあって踊るフォーク・ダンスのポジション

(3) コントラ・ダンス。4組～8組の男女が二列にわかれ、むかい合つて並んで踊るイギリス風の舞踊で、主として18世紀にヨーロッパ諸国で流行した。

(4) ゲーテ: 「若きウェルテルのなやみ」 世界文学全集 6巻手塚富雄訳

P. 272 より引用

- (5) Curt Sacks : World History of the Dances p.188 ザックス氏は
1881年、ベルリンに生れ、ベルリン大学で Ph. D をとる。1930 年客員
教授としてアメリカにわたり、ニューヨーク大学、コロンビア大学等で奉
職し、1953年死亡。アメリカ音楽学協会の会長をつとめたこともあり、民
族音楽学、舞踊史、楽器史等多くの著書がある。
- (6) *ibid.* p.193—194
- (7) *ibid.* p194
- (8) 神戸女学院八十年史 p. 87
- (9) 大島新治：図説 人体の構造と機能 p.156
- (10) 黒沢隆朝：楽典 p. 57 リズムの性質

文 献

今田 恵：心理学	岩波書店	1961
川畑愛義：浅井浅一共編：女子の保健体育	体育の科学社	1957
大島新治：図説 人体の構造と機能	新思潮社	1962
黒沢隆朝：音楽講座 楽 典	音楽之友社	1966
岡田信子：日本伝統音楽とその動き	東京女子体育大学紀要 4 号	1969
藤井清水：弘田竜太郎共編 日本民謡曲集	春 秋 社	1930
ゲーテ：若きウェルテルのなやみ 手塚富雄訳	世界文学全集 6 巻 河出書房	1966

- Groves Dictionary of Music and Musicians
Macmillan & Co. Ltd., London 1954
- Anatole Chujoy: Dance Encyclopedia
A. S. Barnes & Co. New York 1949
- Curt Sachs: World History of the Dances
W. W. Norton & Company, N. Y. 1963
- Ann Schley Duggan, Jeanette Schlottman, Abbie Rutledge:
Folk Dances of the British Isles
A. S. Barnes & Co. N. Y. 1948
- Paul Franklin Baum: The Principles of English Versification
Cambridge Harvard University Press 1929

HISTORY OF THE WALTZ (DANCE)

PART I.

Résumé

Of an innumerable number of dances of all kinds and types, living and obsolete, the Waltz is probably the most long-lived and wide-spread dance ever existed.

Where was this fascinating dance, smooth and buoyant at the same time, born? What made it so popular among the peoples all over Europe, particularly in the 19th century, making them almost disregard other dances and cry for the Waltz? What accounts for a decline, or should it be said a lull, for a short period extending from the end of the 19th century to the beginning of the 20th, and then its revival? There are many such questions concerning the Waltz, and the study of its history may solve some of them.

In Part I, the writer deals with:

1. Direct motives which drove her study on this subject
2. Probable relation between racial temperament and dances and music
3. Mysticism of the number "3"
4. Psychological influence of the Waltz on the rhythm of life
5. Merits and demerits of the waltz
6. Conclusion of Part I and development towards Part II